

【ポスター発表】

パーソン・センタード・ケアに基づいた認知症高齢者介護のあり方

-A 県特別養護老人ホームの事例を通しての検証-

○ 立正大学大学院 片山 茂夫 (009672)

キーワード：パーソン・センタード・ケア、喜び、笑顔

## 1. 研究目的

近年、特別養護老人ホーム（以下、特養）をはじめとする各種高齢者介護施設では、要介護認知症高齢者が急速に増加しており、超高齢社会の日本において認知症高齢者介護ケアは重要な課題となっている。加えて、医療的ケアを要する認知症高齢者の場合は特にケアが困難で、その対応はきわめてむずかしいという介護福祉士の切実な意見も多々ある。今日、多くの介護施設では、施設ケアの質の向上に向けた取り組みがなされているが、各種ケア提供施設には、それぞれ固有に共有されている行動原理や思考など、その施設の文化が存在し、それがケアの質にも影響していると言われている。そこで本研究は、特養でパーソン・センタード・ケアに基づいた高齢者介護に携わっている介護福祉士が、認知症高齢者の喜びや笑顔につながる支援をすることで、生活および介護障害が有意に改善された事例を通して検証し、認知症高齢者の生活の質向上に寄与することを目的とする。

## 2. 研究の視点および方法

A 県にある特養（2 法人 2 施設）に入所している医療的ケアを要する認知症高齢者（2 名）とその家族（2 名）、および施設で生活支援に携わっている介護福祉士（4 名）に半構造化されたインタビューによるデータ収集を行った（2020 年 1 月～2020 年 3 月）。

## 3. 倫理的配慮

研究協力者及び施設長に、研究の趣旨、方法、面接内容について研究協力依頼書と質問内容を用いて、文書と口頭により十分な説明を行い、同意を得た。本研究は、立正大学合同倫理委員会の承認（承認番号制無し）を得た後に実施した。

## 4. 研究結果

### 1) 事例 1

(1) B 氏（90 歳代、女性）アルツハイマー型認知症：入所時は要介護度 3 であったが、その後 4 となった。

### (2) 経過

特養入所前、一緒に生活していた夫が他界し、アルツハイマー型認知症による物忘れや徘徊、見当識障害が頻繁に見られるようになり、B 氏は特養に入所した。施設入所後、環境の変化もあったことにより、自室でのひきこもり、集団生活に馴染みにくい孤立感、易怒性・反抗性が顕著になっていった。そのため施設側は、B 氏のそれまでの生活暦や思いを尊重し、

定期的に生け花や塗り絵といった造形活動を行って頂くことになった。B氏の認知症による混乱と医療的ケアの辛さを避け、安心して造形活動を行えるとスタッフ一同全員一致で考えたからであった。しばらく悪戦奮闘していたが、やがて枝切りバサミを器用に使いこなすようになり、花の形をうまく整えられるようになっていった。B氏の元来の仕事は生け花の師匠であり、美しい花を見て、胸躍るような気分になったと思われる。このことがきっかけでさらに自信がもてたようで、好きな作業に取り組む中で、入所当初のうつむきかげんで、いつもつまらなそうな様子はあまりみられなくなり、頻繁に喜ぶ姿や笑顔をみせるようになり、生け花や塗り絵以外にもいろいろと興味・関心を示すようになった。また、医療的ケアも嫌がらず協力的に応じるようになっていった。

## 2) 事例 2

(1) C氏(80歳代、女性)アルツハイマー型認知症：入所時は要介護度4であり、現在も4である。

### (2) 経過

C氏は思慮深い性格だが、社交的で、歌が大好きだった人。独身のころは公務員をしていたが、夜間に歌謡教室に数年通いのど自慢にもたびたび出場するほどの歌に熱中していた。結婚後は退職し専業主婦となった。長男、長女の2子に恵まれ、自宅近くの内科医院の事務職に就いて、会社員の夫と共働きの世帯で家計を支えていた。しかし、10年ほど前から認知症の症状が始まり、夫と訪問介護士により在宅介護されるようになった。ところが、5年程前からBPSD(行動・心理症状)が活発となり、暴言や介護抵抗といった症状も強くなり、医師の定期診察で痰吸引も定期的に行わなければならなくなり、在宅での介護が困難となったため特養入所となった。入所当初、施設の介護士はC氏のBPSDの対応に苦慮することが多く、事態は深刻化した。そのため、C氏の困っている事を情報収集し、カンファレンスを実施し対応を検討し、その内容をユニットや多職種で共有するようになった。昔、歌が大好きだったことに注目し毎日唱歌を実施するようになった。当初C氏はあまり乗る気でなさそうで、いつもうつむき加減で暗い表情であったが、以前のなじみの歌に込められた思いが蘇ったかのように徐々に笑顔が多く見られるようになっていった。また、介護や医療的ケアにも以前のような拒否・抵抗が少なくなっていった。

## 5. 考察

上記2事例では、利用者の生活史を調べ、「やりたいこと」と、心身機能を踏まえた「できること」を掛け合わせ、その人ができるように担当介護福祉士が中心となり、多職種連携でその人らしさを引き出す支援した結果、本人の記憶と心を動かし、喜びや笑顔を引き出し、認知症の人の生活の質向上につながったと考えられる。

### 参考文献

鈴木みずえ(2018)『認知症の看護・介護に役立つよくわかるパーソン・センタード・ケア』池田書店。